

タイ国立大生による自発的農村開発支援キャンプの活動趣旨と大学生の資質について

恵木 徹 待

(広島大学教育開発国際協力研究センター)

1. はじめに

タイでは毎年、主に国立大学の学生が地方の貧しい農村に出向き、開発支援を行うという活動が行われている。これまで日本でもあまり研究対象となつてこなかった同学生活動であるが、タイでは昨年8月に同活動をテーマに、ウミポン現国王の長女、ウボンラット王女によって制作された「ヌンジャイ・ディアオ・ガン（心はひとつ）」という地方の教育格差是正を訴える映画がタイ全国の映画館で上映されるなど、タイ国内では良く知られる学生活動の一つである。

この学生活動自体は最近始まったものではなく、各大学にもよるが筆者が今回同行したコーンケン大学では約45年前から行われている。同大学は、タイ東北部（現地語でイサーンという）の最大都市コーンケン県の県都にある国立大学である。同大学学生によるイサーンクラブという学生団体が事務局となり、年に4回程（8月、10月、12月、1月）活動を行っている。事務局は約20～30名程度の学生がおり、その他毎回30～50名の一般学生が参加して行われる。参加する学生は基本的にコーンケン大学の学生であるが、同大学に入学することが既に決まっている高校3年生も参加していたりする。

およそ年4回行われる活動は2種類に分けられ、一回1週間程度農村に住み込んで行われるカーイ・アーサー・パタナーは、農村開発支援キャンプと訳され、農村開発

に関する幅広い活動を1週間という、同学生活動の中では比較的「長期」の期間に行われる。この他、一回につき2～3日で開催されるカーイ・シラパー・ワッタナーターム（文化交流キャンプ）も同じく農村において活動を行うが、こちらは主にタイの伝統文化指導が中心である。

吉田は、タイの大学生が卒業後により良い給与形態や雇用環境を確保するための、学歴の持つ経済的価値、また大学卒業それ自体が持つ、象徴的価値を重視する傾向にあることを明らかにしているが（吉田1991）、本学生活動はすべて学生のボランティアによるものであり、大学のカリキュラムの一環として行われているものではないので、当然のことながら単位認定や免状の取得にはつながらない。また、本活動を行ったことが就職に際し有利になるといったことも一切なく、立身出世のために行う性質のものではないことは明らかである。

一方で、本活動は社会変革を目指す学生運動のような性質を持つものでもない。では、タイにおいて広く行われている、大学生による農村開発支援活動はいかなる性質のもので、どのような目的を持ち、その成果はどの程度達成されているのであろうか。本稿ではまずタイにおける国立大学生の社会的地位、そしてタイ特有の階級社会につき先行研究を中心に考察し、その後筆者が実際に同行・参加した学生農村支援キャンプにおけるフィールド調査の結果から、タイにおける学生活動の目的、活動形態、そして実際の活動の成果や影響等につき論証

を試みたい。

2. タイにおける学歴社会と 国立大学生の社会的地位

タイにおける大学進学率は、2009年3月の数値で68.1%であり（外務省ホームページ）、日本の同年の数値である41.5%（学校基本調査）と比べ、高い数値を示している。但し、タイのこの数値には無試験で入学することのできるラムカムヘン大学（学生数約45万人）及びスコタイ・タマティラート大学（学生数約17万人）も含まれており、これらの大学ではドロップアウト率も高く、全体としての高等教育学歴取得者は上昇しない傾向にある（吉田 1991）。また、タイでも「どこの大学を出たか」という、いわゆる「学校歴」が重視され、特にチュラロンコーン大学やタマサート大学といった国立大学の、社会における地位は未だ衰えを見せない。こうしてみると、タイでは依然、有名国立大学の社会的地位は高く、国立大生は上層階層に位置すると言える。

ただ、階層間移動という観点から見れば、タイの中間層は上層から没落して中間層になった者よりも下層から上昇して中間層になった者が圧倒的に多く、自らの努力と才能によって下層から上昇したと感している者も多い（浅見 1998、324頁）。この意味では、多くの者が現在の立場や身分にとらわれず、自らの努力により上層に上昇可能な社会であると言えるのかも知れない。末廣も、2003年に行った、タイ東北部に位置するサコナコーン県にある教員養成大学における調査で、昼間コースに通う学生の約8割が農民の子弟だったことを明かにし、その背景には1996年に設置された国家育英基金によりタイでは高校から大学院までの学資を無利子で借りうける制度があることを挙げている（末廣 2009）。今回の調査で筆者がインタビューを行った多くの学生が

中低流家庭出身であると申告した結果も合わせて考えると、タイにおいても日本と同様、入学前の個人の努力により大学生としての身分の獲得がある程度可能であるということができよう。

3. タイの階級社会の成り立ちと 近年の変化

タイはこれまで多くの識者が明らかにしているように、階層社会である（ボンパイ チット・ベーカー 2006；船津・籠谷 2002；玉田 2003；赤木 1990）。田中によれば、仏教国であるタイにおいては仏陀神王思想により、人間を超越した存在としての仏陀を神に見立て、その化身としての国王を造り出した。その仏陀神王思想が王権イデオロギーを生み出し、現在につながる社会の階層制度の原型である、サクディ・ナー制度の基盤を提供したと言われている（田中 2008、54-56頁）。サクディ・ナー制度というのは当時の社会を構成していた王族、貴族官吏、平民、奴隷のすべての身分に属する人々に対し、土地面積を表すライを単位にして、その量で位階づけした制度である（田中 2008、36頁）。

この従来からの階層社会文化に大きな変化を与えたのは、1960年代以降の、都市を中心とした急速な工業化と経済発展であった。タイが経験したこの特殊な経済環境は学歴分断的労働市場の形成を促し、新中流階級も貨幣経済に巻き込まれて土地を失った農民もともに切実な教育要求を抱くようになった（沖津 1991）。この現象は、首都バンコクへの一極集中が一段落し、地方の主要都市の発展が目覚ましい今日においても引き続き発生しており、都市部の発展に伴う農村経済の農外部門への依存を促進させ、その結果、農村の中における日雇労働者層と学歴を身につけた常雇労働者層の一層の分化をも引き起こしている（木村

1998)。このように、タイでは近年学歴階層社会が形成、進展しており、上述のように、国立大学生はその階層の上位に位置すると思われる。

4. タイにおける大学と社会の関係

前述したように、タイでは古くから、サクディ・ナー制度に基づく階層社会が形成、維持されてきた(田中 2008, 54-56 頁)。近年の農村部住民(主に下層階層)と都市部住民(主に上層階層)の政治闘争の隆起はここではおいておくとしても、タイ社会において、現代まで階層社会が存続してきたことは何か理由があると考え。上記の制度内においては、社会序列の上の者は下の者より、より多くの功德(ブン)を積み徳を有することを示すため、下の者に慈悲を垂れ布施を施さねばならないという意識を人々に植え付ける。その一方で、下の者には上の者の徳にすがって生き、上の者は神霊力で裏付けられた威力を有する者なので畏敬をもって接しなければならないと説く(田中 2008, 74 頁)。タイ社会において、この「上の者」とは一般的に地位の高い者、年長者、経済力のある者、高い教育を受けた者を表す。この価値観は西洋で言われている、ノーブレス・オブリージュ思想にも似たものであることが窺える。つまり、上の者が下の者に「施す」ことにより下の者からの敬意を受け、社会秩序が維持されてきたのである。

このような「持てる者」が国家及び社会全体へ「施し」、リードしていくという思想(田中 2008, 74 頁)は、現代の学歴による階層社会に移行した後も十分存続している。チュラロンコーン大学名誉教授である Suwanwela は、特に発展途上国においては、大学への、国家建設及び社会建設における期待は高いと述べている。更に、大学はただ単に知識や技術を提供することにと

どまらず、倫理感や道徳観を養う場所であることがその責任として求められると続ける。そして、社会において入手できる客観的事実と知見の批判的な考察を行い、合理的な結論に達する過程は他の機関にない大学に与えられた重要な役割であると論じている(Suwanwela 2008)。

以上のことから、タイにおける学生活動は進学や就職において有利となる、最近の我が国における「ボランティア単位制度」のような性質のものでなければ、社会変革を起こすための学生運動でもなく、階級社会であるタイにおいて、支配階級が非支配階級に恩恵を施すといった性質を持つものであるといえるのではないか。そう考えれば、これまで45年間も同様の学生活動が長く行われ続けてきた一つの回答にもならないだろうか。

次項では、フィールド調査の結果から、更に論証を行っていきたいと考える。

5. 調査の概要

(1) 調査目的

これまでの先行研究により導き出されたように、タイにおける学生活動は大学の単位取得のためでも、その後の就職活動を有利に進めるためでもなく、また一方で、農民と共に歩み社会変革を唱える種のものではない。今回の調査では、その実態は、教育エリートである彼らの見聞を広め、かつ大学生としての「知見」を農村において付与もしくは共有することを目的とした活動ではないか、そしてその成果はあまりあがってはいないのではないかという仮説につき、彼らの行う農村開発支援手法やその成果、及び学生や農民の同学生活動に対する考え方等に関する観察を行うことにより更に論証を試みたい。

(2) 調査方法

調査は2008年10月10日～17日に、コーンケーン大学学生らによって開催された農村開発支援キャンプ（カーイ・アーサー・パタナー）において、筆者自らが学生の活動に参加しその様子を観察する、参与観察の手法で行った。また、一回の活動期間、場所、継続性、そして活動期間中の成果（対象村民への知識の伝達具合、完成した建造物等）などの客観的なデータも使用し、参与観察結果の妥当性を補充した。

調査では特に通訳を介さず、現地語であるタイ語を使用した。但し、当地ではタイの東北弁ともいえるイサーン（東北）語を学生も農民も使用しているため、時折一部学生にタイ標準語で解説してもらいながら調査を進めた。

(3) 農村開発支援キャンプ

① 対象村の状況

今回の農村開発支援キャンプの開催地は、タイ东北部チャイブーム県コーンサーン市バーンターサラ村である。同村の入り口までは、コーンケーン県都から主要幹線道路を車で2時間行った程であるが、幹線道路から同村に到着するまでに更に車で1時間を要する。同村への入り口からは道はほとんど舗装されていないか、舗装されていても補修工事が長年施されていない悪路を進まなければならない。

村は108家族から構成されており、この村でもタイの多くの農村と同じく、若者は中学3年を修了しバンコクやロブリー周辺に働きに出ることが多く、村には高齢者や女性が多い。生業は農業（主に稲作）、菜種製油、ブリーク栽培等を営んでいる。また、タイの一村一品運動であるOTOPと言われる活動が同村でも浸透しており、農業協同組合も形成され、現在では比較的うまく運営されている。

② 学生による活動

今回キャンプに参加した学生は総勢約70名で、その内の50名は一般参加である。但し、学生の中には既に過去に同活動に参加した経験を持つ学生も多い。学生の出身学部は、農学部、工学部、医学部、看護学部、政治学部、経済学部、法学部、社会学部、教育学部と多岐にわたっている。

これら参加学生は、チーム編成により毎日異なるチームに参加することになる。また、チームリーダーには、イサーンクラブの事務局員でかつ当該活動に専門知識を持つ、特定学部の学生が配置されチーム活動を先導する。筆者が参加した際には、a) 公衆衛生、b) 児童教育、c) トイレ、図書館、菜園の建設、d) 実態調査、コミュニティー教育、生活指導、e) 「足るを知る経済」指導、農業指導、f) 食事の準備、g) 事務、の7チームが編成され、各学生はそれぞれのチームに配置され活動を行った。筆者は、食事準備、事務というロジ作業を除く5つの班すべてに同行した。

活動期間中の、一日の主なスケジュールは、以下のとおりである。

午前5時	起床 校庭において準備体操
午前6時	村人の家で水浴び 村人と歓談
午前7時	朝食
午前8時半	活動開始
午後12時	昼食
午後4時	活動終了
午後4時半	村人の家で水浴び 村人と歓談
午後6時	村人を招いて各種イベント
午後9時	ミーティング（音楽、ゲーム、各班からの活動報告、各種伝達事項）
午前1時	就寝

寝泊まり及び活動のほとんどは村の小学校を拠点として行われ、朝夕の水浴びの時は村に赴いて各家庭の浴室を借り、終了するとお菓子などを頂きながら村人と歓談する毎日であった。また、1週間の間5日程度は、夜村人を招いての各種イベントが開催され、学生と村人が交流する最高の機会であった。上記の表にもあるように、学生によるミーティングは毎日相当な時間が割かれて、就寝時間もかなり少ない。これはおよそ平均的なタイ人の一日のスケジュールとは相当な差異があり、時間だけで見れば学生は期間中相当な時間を本活動に割いていることになる。

以下、各チームの活動につき詳しく見ていきたい。

a) 公衆衛生

午前中、看護学部の事務局員が中心となり、村の児童（幼稚園生、小学1～6年生）を対象に歯磨き指導を行った。歯磨きは学生団体が用意をし、各児童に配布する。児童は熱心に学生らによるボードを使った説明に耳を傾け、その後実際に歯磨きを行い、終了すると看護学部のチームリーダーに口を開けチェックを受ける。（図1参照。）



図1 看護学部学生による、村の児童への歯磨き方法指導。

午後は、小学4～6年生を対象に男女それぞれに分け、それぞれ別室で青年教育、性教育を受ける。筆者は男子のクラスに同席したが、学生による児童への教育の中で、男性は女性を守るために力があると説明した箇所があったが、タイの社会・文化事情を反映しているようで興味深く聞いていた。

b) 児童教育

原則、児童を幼稚園及び小学1～3年生のグループと、小学4～6年生のグループの2つのグループに分け、本を読んで聞かせたり図工を指導したりする。筆者自身も小学4～6年生のクラスにおいて約2時間半に渡って英語の指導を行った。指導を行うに際し、時間及び内容につきチームリーダーである学生から特に筆者への要望はなかった。

実は筆者は当時、同じタイ東北地方の村の小学校（キャンプが開催された村より少し状況は良い）において、毎週1回同じく小学4～6年生の児童に英語の指導を行っていたが、同キャンプ開催地の児童の方が英語力、理解力において優れている印象を受けた。この原因については別途分析が必要である。

c) トイレ、菜園の建設

1週間の活動期間を通して、トイレ及び菜園を同小学校校庭脇に建設した。菜園は土おこしから、種まき、水まきまで行われ、最後に手製の看板を作成し入口に設置した。このチームは力仕事が多いため、比較的男子学生の方が多くいた。また、同小学校内の水はけが悪い箇所などにも水はけのための簡易迂回路などをこしらえていた。

d) 実態調査、コミュニティー教育、生活指導

上記3種類の活動とは異なり、この活動は拠点の小学校を抜け出し村内の各家庭を回り、生活状況等の実態調査を行った。学生はそれぞれ思い思いの質問を村人に行い各人メモを取っていた。村人が生活上の問題点などに言及すると、学生がアドバイスのようなことを返答し、村人もそれを聞いている。

e) 「足るを知る経済」指導、農業指導

「足るを知る経済」(セータキット・ポーピアン)というのは、経済危機がタイで発生した1997年にウーミボン現国王が毎年恒例の誕生日における講話の中で提唱された

ものであり、「ほどほどの生活」を強調しグローバルイゼーションの結果として生じる広範で急速な社会経済的、環境的、そして文化的変容に的確に対応し、タイ式生活様式の保持の必要性を訴えたものである(ボンパイチット・ベーカー 2006)。

伝統的に国体である王制と強く関連のある国立大学(Suwanwela 2008)の学生としては、国王によるこうした指南も勉学及び学生生活を行う際に大なり小なり影響を持つ。実際の活動では、農学部の学生が、大学で学んだ有機農法の行い方等を農協において農民に説明し、また、逆に、学生の方も農民から実際の有機農法の実例につき学ぶ等、双方向性の高い活動が行われていた(図2参照)。

f) 学生による議論

前述(e)の「足るを知る経済」(セータキット・ポーピアン)につき、ある夜、小グループに分かれ「村に根ざした充足経済はいかにあるべきか」をテーマに議論が行われた。筆者も一つのグループに分かれ議論に参加した。学生の議論を聞いての気づきの点は、学生の議論が概して非常に理想主義的であり、かつ「上から指導する」というスタイ



図2 農学部学生による、農協における有機農法指導。

ルをとっていた点である。村や村人の現状やニーズを正確に把握した上でそのような発言ならば問題はないと思うが、現状把握も不十分であり、かつ非常に教科書通りに議論を行っている印象を持った。筆者がこのような印象を直接、今年で大学5年生であるという、前事務局長だった男子学生（英語学科）に投げかけたところ、同学生も筆者に同意していた。

伝統的なタイ式生活様式の保持（ポンパイチット・バーカー 2006）だけでは十分でなく、更なる国の発展の必要性も同時に感じている学生としては、国王による「足るを知る経済」の考え方に多少の違和感を感じている者も多いのかも知れない。しかし、学生による議論の中でこうした相違点につき突っ込んだ議論は行われることはなかった。

g) ミーティング

1週間の活動期間中、毎晩学生によって各班ごとの活動報告が行われた。但し、毎回の報告会の前にゲーム及び学生キャンプにまつわる歌の合唱等が先にあり、ようやく活動報告に移っても一通りの報告はなされるが質疑応答や議論の時間は学生どうしの冗談も多く、小グループによる議論と同様、ここでも突っ込んだ議論はあまり行われていなかった。

③ 村人の反応

滞在期間中、学生のみならず村人もいろいろ良く話をした。村人は概して学生の訪問を歓迎していた。キャンプが始まる前、小学校に着くとそこには村人、児童らが一列に並び、花束を手を持って学生を大歓迎で迎える。村人に学生を歓迎する理由を尋ねたところ、彼らは一様に大学生は知識を持っているので勉強になるからと返答した。また、1週間の滞在では短く、最低でも1か月は居てもらえると多くのことを学

生から学ぶことができ有意義だということであった。

6. 考察

以上の実地調査結果を踏まえ、項目別に考察を試みたい。

(1) 活動形態

今回の学生による活動は、大きく、1) 知識の共有（公衆衛生、児童教育、「足るを知る経済」指導、農業指導）、2) 実態調査（実態調査、コミュニティ教育、生活指導）、3) トイレ、図書館、菜園の建設及び4) 学生による反省会、議論の4つの形態に分けられる。

(2) 期間

上記(1)、2) 実態調査もしくは3) トイレ等の建設はまだしも、知識の共有を行うのに、1週間では非常に短いことは否めない。このことは先の村人たちの評価にも表れている。

(3) 成果・専門性

5つの学生活動の中では、公衆衛生指導や農業指導等概して理系分野の活動はそれなりに高い専門性が感じられ、当然村人からの評価も高かった。一方で、児童教育、実態調査というどちらかと言えば文系分野の範疇に入る活動では、期間中あまり芳しい結果は見られなかった。例えば、児童教育では、いわゆる知識だけでなく、教育・学習の手法が学生なりに村人や現地の学校と共有ができたか否かが意義を持つと思われるが、今回この点は重視されていなかったように思われる。また、実態調査では、村人へのインタビューの方法、事項、サンプルの抽出、結果の分析等、ここでも大学で学んだことが生かされているとは言い難

かった。また、今回結果が出なかった別の理由として、両活動を行う学生の事前準備の欠如が挙げられる。事前に説明用ボードを作成し、用具・サンプルを用意して持参した公衆衛生グループ及び農業指導グループとの差異はこの辺りにあると考える。これは、今回の学生活動を行うにあたって、参加者が事前に打ち合わせ・準備等を十分に行っていないことを意味する。

また、前述のとおり、毎日の活動の中で学生たちは最低一回、全体で集合し、その日一日の各グループの活動報告を行い、場合によっては小グループに分かれての議論が行われたが、そこでの議論においても専門性の高い知識を持って口角泡を飛ばし踏み込んだ話し合いがなされることも少なかった。

最後に、本学生活動の専門性とは直接的な関係は薄いが、学生にあまり英語力がないことも調査中明らかになった。調査自体はタイ語を使用して行ったが、たまたま英語で会話する機会があり、そこでは多くの学生が英語を話せず、また話せても十分な英語力ではない学生が多かった。

(4) 現地での協働の有無

今回の調査で気にかかったのが、現地の学校、寺、農協等との協働の少なさである。知識の共有及び実態調査を効率良く行う上では、それなりのノウハウを既に持ち、現地仕様で実際に行っている経験を持つこれらの団体との打ち合わせや意見交換が必要であろう。例えば、今回の児童教育に関して言えば、1週間では児童への知識の供与には時間が足りないかも知れないが、最近の教育手法等に関し、現地の教師と話し合いのセッションを持てば、その新しい手法がその後現地の教師を通じて児童に還元されていくことが予想される。しかし、今回このような施設との協働は上記の農協での活動の一部を除いてはほとんど見られな

かった。

(5) 教員・OBOGからの指導の有無

今回の学生キャンプに同行したのは自らOGであるという同大学の女性教員1名であった。同教員は期間中、各班の活動及び毎日のミーティングに同席することは多かったが、その場で特に指導するようなことは一切見受けられなかった。本学生キャンプの、大学生の自主的な活動という性格を考えれば、あまり教員が頻繁に指導を行うのも考えものであるが、もう少し学生へアドバイスを付すというようなことは必要ではないだろうか。この辺りのことが行われれば上記(3)の結果・専門性や(4)の現地での協働にも改善が見られると考える。また、同学生キャンプの参加者にOBまたはOGである卒業生や関係者は先の大学5年生の現役学生以外は見られなかった。

(6) 学生の意識

タイにおいては、国立大学の大学生という教育エリートとして立場にありながら、自主活動として本活動に参加し少しでも社会に貢献したいと思う学生が多いことは感心するに値する。一方で、実際の活動期間中において、日々の活動方針や成果につき更に向上させていこうという気概は確認できず、与えられた任務をこなすだけの印象を受けた。また、(4)において述べた、現地でノウハウを有する団体との協働の無さという点からも本学生活動の目的、学生の意識等が窺える気がする。

村田は、タイでは学歴保有者であるホワイトワーカーを評価し、肉体を使う農民や労働者等をあまり評価しない社会的価値観が存在すると指摘しているが(村田2007)、今回のコーンケン大学学生の意識にも大なり小なりこのような傾向は認められた。このことが良いか悪いかという評価は単純にはできないと考える。しかし上述

したように、学生としての、もっと言えば教育エリートとしての実力・専門性が欠如している状況が重なれば、それは苅谷の言う、学歴—実力乖離論（苅谷 2008）が指摘され得る結果につながっていくことは十分考えられる。

学生の意識を図る上では、今後継続する意識があるか否かに関する、後述する活動の継続性の程度、そして前述したOB・OGの参加状況からも合わせて分析することが必要である。

（7）活動の継続性

同大学は年間4回農村における学生活動を行っているが、対象となる村は毎回異なり、かろうじて最後の回に再度訪問するが、その際には3つの村を同時に訪問し、かつ確認作業程度の目的に過ぎない。また、今回参加している学生の多くはこれまでに同様の活動に参加経験を有するが、それも一つの村を何度も訪問しないという意味では同じである。農村開発においては、調査にしてもプロジェクトにしても再度訪問して成果を確認していくことは重要な点であるが、本学生活動においてはそうした行動は取られていない。また、毎回の活動後に全体の報告書、もしくは各活動の記録等が文書で残される訳でもなく、農村開発における「参加」ではなく、「結果」を重視していくなれば、この辺は今後の改善点になるのではないだろうか。

（8）まとめ

これまで見てきたように、今回の学生活動では知見の共有、実態調査、そしてトイレ・菜園等の建設という主に3つの分野に分かれ、各参加学生は日々与えられた任務を一生懸命に行う一方で、村人に対し特に政治的プロパガンダにつき論すなどといった学生運動のような行動は一切見られなかった。こうした点から、本活動は現体制を維持し

つつも、農村において貧しい階層に向け自らの持っている知見の共有付与を行うとともに、農村の実態を知るという目的で行われていることが窺える。

成果については、学生による活動及び問題意識の保持の一過性、専門知識の欠如、という二つの点から、公衆衛生指導等を除く、知見共有の一部、そして実態調査のほとんどについてはその成果につき疑いが残る。

7. 終わりに

以上、筆者が行ったタイの学生による農村開発支援キャンプの実態調査を中心に、冒頭で提示した問いに関する論証を行ってきた。今回の調査の結果から新たな問い、課題が多く生まれている。まず、学生活動及び学生による問題意識の一過性については、学生の活動参加理由や社会開発に対する考え方、彼らの卒業後の進路、身分及び収入の安定性等に関する調査が、そして専門性についても、タイの大学教育の質の問題（専門的かつ実践的な教育が行われているか否か等）につき、今後更なる調査・分析を行っていく必要がある。以上のことはいずれも今後の研究課題であり、今回の調査で新たに生じた疑問に答えていくためにも鋭意調査・研究を進めていきたいと考えている。

参考文献

- 赤木攻（1990）『タイの政治文化—剛と柔—』 勁草書房
- 浅見靖仁（1998）「中間層の増大と政治意識の変化」田坂敏雄編『アジアの大都市 [1] バンコク』日本評論社、305-328頁。
- 沖津由紀（1991）「遠隔高等教育導入の背景としてのタイの社会構造：重層的「二重構造」の存続と揺らぎを中心として」『タイ社会の変貌

- と遠隔高等教育の展開 : アジア・太平洋地域における遠隔教育の実証的研究 調査報告 (2)』36 巻, 7-26 頁.
- 荻谷剛彦 (2008) 『『学歴社会』の変貌』荻谷剛彦・濱名陽子・木村涼子・酒井朗編 『教育の社会学』 有斐閣, 206-265 頁.
- 木村茂 (1998) 「北タイ農村の就業形態と農村階層構成の変化 : チェンマイ県クランドン村の事例」『地理科学』53 巻1号, 1-26 頁.
- 末廣昭 (2009) 『タイ 中進国の摸索』 岩波書店, 130-131 頁.
- 田中忠治 (2008) 『タイ社会の全体像—地域学の試み—』 日中出版.
- 玉田芳文 (2003) 『民主化の虚像と実像 : タイ現代政治変動のメカニズム』 京都大学学術出版会.
- パースック・ポンパイチット、クリス・ペーカー (2006) 『タイ国—近現代の経済と政治』 刀水書房.
- 船津鶴代・籠谷和弘 (2002) 「タイの中間層—都市学歴エリートの生成と社会意識—」服部民夫・船津鶴代・鳥居高編 『アジア中間層の生成と特質』 日本貿易振興会 アジア経済研究所
- 村田翼夫 (2007) 『タイにおける教育発展—国民統合・文化・教育協力』 東信堂 65 頁.
- 吉田文 (1991) 「学歴主義の拡張期における人々の意識」『タイ社会の変貌と遠隔高等教育の展開 : アジア・太平洋地域における遠隔教育の実証的研究 調査報告 (2)』36 巻, 121-144 頁.
- Suwanwela, C. (2008). Social Responsibility of Universities in Thailand. *Higher Education Forum*, 5, p.11-24.